

ペルーから来たAちゃん

Aちゃんの一家がペルーからうちのとなりにやって来たのは、去年の7月でした。以前にもブラジルやペルーの人と出会ったことが無いわけではありませんでしたが、全く日本語が話せない人たちがとなりに来たことに何となく不安を覚えていました。

「なあお母さん、Aちゃん日本語わかるん？」

わたしの子どもも最初は、突然外国から来た友だちとどう接したらいいのか戸惑っているようでした。しかし、子どもたちが、Aちゃんと自然にふれあえるようになるのにあまり時間はかかりませんでした。

「Aちゃん遊ぼうか。」

「これはこうすんねんで。」

子どもたちは言葉が通じようと通じまいとそんなことはかまいません。それどころか、いつの間にかわたしたち大人の知らないAちゃん情報をいっぱい持ってくるようになったのです。

「おかあさん、Aちゃんちのハムスターの名前知ってる？」

「ペルーのお菓子食べたことある？おいしいで。」

外国から来た新しい友だちとのふれあいを当たり前のように楽しんでいるようでした。そんな生活の中でAちゃんも次第に日本語でのコミュニケーションをとることができるようになってきました。

わたしにとって、もう一つ驚いた出来事がありました。

「Aちゃんが来てくれてよかったわ。ペルーの友だちなんて、めったにないからなあ。Aちゃんも見知らぬ国に来てたいへんやろう。」

うちの子とも同じクラスの保護者がこんなことを言って、Aちゃんを家によんで一緒に遊んだり、プールで水遊びをしたり、家族ぐるみで交流を始めたのです。そのおかげもあってか、友だちと一緒に自転車の練習をしたり、近くの公園へ行って遊んだりするAちゃんの姿も見られるようになってきました。

ところが、学校が夏休みに入ったときのことで。

「おかあさん！Aちゃんがランドセル背負ってラジオ体操に来たで！」

ラジオ体操が終わったうちの子が、わたしのところにとんで来ました。わたしは、「しまった！」と思いました。あわてて子どもたちがラジオ体操をしている広場に行ってみると、ランドセルを背負ったAちゃんが帰っていくところでした。

実は、わたしは夏休み前にAちゃんのおうちの人からラジオ体操のことを聞いてきたので、いろいろと教えていました。それなのに、普段の登校とラジオ体操がどう違うのか、十分に伝えることができていなかったのです。

その日以来、わたしはできる限りAちゃんやわが子がラジオ体操をする広場に朝出かけていくことにしました。一生懸命音楽に合わせて体操をするAちゃん。わたしや友だちの動きを見ながら、知らない体操を懸命にまねながら体操をする日が続きました。

「うでを前から横に、いち、に、さん、し……」

Aちゃんなりにこの国になじもうと努力していたのかもしれませんが。結局Aちゃんは、ほとんど休むことなくラジオ体操に参加しました。

『にほんにきてさいしょはこわかった。いまはともだちもできてたのしい。』

わが子が持って帰って来たクラス文集にAちゃんはこんなことを書いていました。ペルーから日本にやってきた人たちの思いやがんばり。大人の想像をはるかに超えた子どもたちの行動力。そして、地域のあたたかさや交流の大切さ。Aちゃんのおかげでいろんなことを教えてもらった一年でした。今度の日曜日、Aちゃんのお母さんにペルーの料理を教えようのを楽しみにしています。